「感情」と「理」を極めた2曲 演奏

シューマン〈幻想曲〉 ショパン〈ソナタ第3番〉 ロマン派ピアノ曲の最高峰

インタビュー

小山 実稚恵 さん

Photo Osamu Hoshikawa

大阪オリジナルの「小山実稚恵のピアニズム」シリーズは、小山さんが「人生をともに歩んでいきたいと思っている作品」を選んでもらい、その解釈や演奏技法などを、テーマを立てながら披露していくことを企画趣旨としています。第2回となる2024年4月のリサイタルは「幻想と情熱」のサブタイトルのもと、シューマン(1810～56)とショパン(1810～49)の傑作がとりあげられます。その意図や演奏会への思いを小山さんに聞きました。

新シリーズ第1回（23年4月）は大好評で、ご来場いただいた方々から「超感動ものだった」といった感想を多数いただきました。

「私も、演奏会アンケート（の感想記述部分）に目を通させていただきました。聴衆の皆さまが、こんなにも真剣に演奏を受け止めてくださり、そしてそれぞれ感想まで書いていただいたことに感謝しました。同時に、大きな励みをいただきました。演奏家として、ほんとうに嬉しく思っています」

「一生弾き続けたい曲」として

こんど（24年4月）の第2回プログラムには、シューマンの〈アラベスク〉と〈幻想曲〉、ショパンの〈ソナタ第3番〉の3曲を挙げていただいています。

「シューマンの〈幻想曲〉とショパンの〈ソナタ第3番〉は、いずれもロマン派ピアノ曲の傑作中の傑作に挙げられる作品です。ご記憶くださっている方もいらっしゃると思いますが、シューマンの〈アラベスク〉と〈幻想曲〉は、私が2006年春に始めた12年間・24回の『ピアノ・ロマンの旅』シリーズの第1回冒頭に演奏しました。このときは、06年がシューマンの没後150年のメモリアル・イヤーで、しかも、シューマンの作品がピアノという楽器の魅力を引き出すうえで欠くことのできない重要なものであること、そして両作品の調性がハ長調――つまり平均律の最初の音＝すべての始まり――ということで選びました。そして15年余りを経た今、それらの曲に対する私自身の思いが変わっていることに気づきます。作品に対する愛が深まっているのです。なぜかわからないのですが、〈幻想曲〉でのシューマンの想いを痛いほど感じ、以前、この曲を弾く時に、この狂おしいほどのクララへの想いを、どうして今ほど感じなかったのか不思議に思えるのです。今は弾いていて胸が苦しくなるほどです。ショパンの〈ソナタ第3番〉（『ピアノ・ロマンの旅』シリーズの第6回で演奏）についても同じです。第1楽章の第2主題の美しさや、第3楽章の深さ、第4楽章のパッションなど、言葉にはできないほどです。ですので、今回、『私が一生弾き続けたい曲』として、この2曲をあらためて皆さまに聴いていただきたいと思い、プログラミングしました」

激情と悲嘆を背景に…

演奏会サブテーマの「幻想と情熱」は、シューマンの〈幻想曲〉の第1楽章に付された「どこまでも幻想的かつ情熱的に」からでしょうか。それだけでも小山さんの、この曲への思い入れがうかがえます。

「シューマンはピアニストをこころざして20歳のとき、優れたピアノ教師として知られていたライプツィヒ（ドイツ）のフリードリヒ・ヴィークに師事します。しかし、熱心さのあまり、指を鍛えようと無理な練習を重ねて手を痛めてしまい、ピアニストの夢をあきらめざるを得なくなります。そして作曲家として生きていこうと決意するのですが、その頃から、師のヴィークの娘であるクララ（1819～96）と相思相愛になります。ところが師に猛反対され、結婚は到底無理という状況に追い込まれます。だって、クララは10代半ばながら、すでに天才ピアニストとして認められ、人気を博していたのですから、父親としては先行きの分からない駆け出しの作曲家との結婚を認める訳にはいかなかったのでしょうね。しかし、シューマンとクララの愛はいよいよ燃えさかります。シューマンはクララへの強い想いと、師の理不尽な仕打ちの狭間で悲嘆します。進退きわまるというのでしょうか。もどかしく、やるせない日々が続いたことでしょうね。そのさなかに作ったのが〈幻想曲〉です（完成は1838年）。だからこそ、シューマンの狂おしいまでの感情が人々の心を揺さぶるのでしょうね。私の心も、ちぎれそうになります」

移ろう心の内が見える

具体的には……

「たとえば第1楽章の冒頭部分、左手のパッセージを弾いていると、グルグルにかき乱されたシューマンの心が16分音符のうねりになっているのではと思えてきます。まるで心がミキサーにかけられたような感覚と言えばよいのでしょうか。その上に現れる右手の、下降するオクターブ。クララへの想いに満ちたシューマンの旋律ですが、それは憧れと希望であり、落胆と苦難でもある。いろいろな感情が錯綜するのです。とにかく第1楽章は相反する感情が支配している。肯定と否定、希望と落胆、喜びと悲しみ…といった刹那の感情が常に現れ続けるのですから、演奏する方も胸が張り裂けそうになります。中間部には、実は、私はシューマンが「クララ～～～！」と絶叫しているのではないか、と感じている箇所があります（笑）」

「そして第1楽章の最後に、ベートーヴェンの歌曲〈遥かなる恋人に〉の一節、『愛しい人よ、僕があなたのために歌った、この歌を受け取っておくれ』の旋律をもとにしたフレーズが現れます。〈幻想曲〉はもともと、楽譜の売上金をベートーヴェンの記念碑建立のために寄付する目的で作曲していたので、この旋律の引用はベートーヴェンへのオマージュであったでしょうが、もう一つはクララへの想いを重ねたと私は思っています。それほど、クララを愛しているということを示したかったのでしょうね。第2楽章は行進曲風で、逆境に打ち克とうとしているようです。第3楽章になると一転して、現実と幻覚とを行きつ戻りつ彷徨っているような、まさに幻想的世界を繰り広げます」

次ページにつづく

2023年から始まった大阪での『小山実稚恵のピアニズム』は、私が「人生を共に歩みたいと思っている作品」を演奏するシリーズです。今回の第2回は「幻想と情熱」のサブテーマで、心の内から外に向かう力を感じながらシューマンとショパンを演奏したいと思っています。

シューマンの〈幻想曲〉は、狂おしいほどのクララへの想い、抑えきれない感情の発露と自身への問答です。希望と絶望の狭間からシューマンの訴えの声が聞こえてきます。瞬間瞬間に移り変わるシューマンの気持ちを、そのまま音で受け止めたいと思っています。そして第3楽章でのシューマンとクララの二重唱。これは、夢か、うつつか、幻か…シューマンでしかあり得ない世界観です。

後半のショパンの〈ソナタ第3番〉は大規模な構築の中で、ショパンのロマンが深々と歌われます。非常に情熱的でありながら、あたたかな目、そして冷静な目も感じます。音楽が極限まで磨き上げられ、秘めた情熱は第4楽章の最後、右手の華麗なピアニズムとともに、左手のファンファーレで高らかに歌われます。なんという作品なのでしょうか。

ロマンの香り漂う「幻想と情熱」。二人の天才、シューマンとショパンの世界に身を投じて演奏したいと思っています。

小山 実稚恵